

資料

在学生の書簡よりみた

第一次東京大学医学部の一面

不破 義信

まえがき

東京大学医学部の初期には医学通学生（明治十三年十月より別課と呼称）と正則生の二本建であった。通学生は名称の示す通り通学生であり、比較的高年齢の者で編成され、授業は日本人教官より受け、年限は四年であった。正則生は若年者ばかりで講義は外人教師を主とし、外国語で行われ、全員入寮制を建前としたが、後通学する者も生じた。修業年限も、予科本科よりなるため長期であった。このような通学、正則の二様の制度は明治十二年第一回の卒業生を出して以来同二十二年六月の卒業まで継続、以来別課は廃止された。この十年間に別課より一千百余名の卒業生を出し、近代医学を体得した者として社会の要望に應えること大であった。

さて、本稿の資料は医学通学生で、明治十二年第一回卒業生として名を列ねる不破震吉と、更に明治十一年通学生として入学した親族の間碯周治の兩人が、震吉の兄不破為信に折にふれ郵送した私信のうちより医学部初期の様子を窺ひ知ることのできるものを抽出してとりまとめたものである。尚是等の書簡以外に参考に

なる書信もあった筈であるが、現在のところ見当らないので、断片的な記事の接続であるため文体として不自然な点もあるけれども寛恕されたい。

注 第一次東京大学とは現在の東京大学と対比してのことであり、両者の間に帝国大学と呼んだ時代を挟んでいるからである。

第一章 明治十一年五月施行の入学試験の概要

間碯周治の記録によれば、通学生六〇名を入門許可としたが凡そ三百名の志望者で中中の入学難であった由を記している。

五月二日より十三日まで漢学の試験あり、その間九日と十日は三百名一度に数学の試験が行われた。試験の課目は左の通り

一 大日本史 日本外史 日本政記

一 文章軌範 綱鑑易知錄 通鑑 博物新編 全体新論

以上素読

書取

窮理書 病理書 薬剤書

数学

第一問 一日ノ長サ九時五分ノ三ナルトキハ太陽出沒何時ナルヤ

第二問 東京ト程ヶ谷ト相隔ツルコト九里三分ノ二ナリ、今此兩

所ヨリ馬車出發シテ互ニ府ト駅トニ至ル、但シ甲ハ一時間ニ行

クコト三里、乙ハ一里四分ノ三ナリト云ウ。甲乙何時ニシテ途

中ニ出逢ヤ、亦其出逢迄何里宛走ルヤ

第三問 一戦ノ後一聯隊ノ死亡ヲ算スルニ第一大隊ノ第一中隊ニ於テ僅ニ其四分ノ一ヲ残セリ、此中隊ニ於テ失ヒシ人員ハ全隊

ニ於テ失イシ人員ノ七分一ナリ、今残兵ヲ各隊平均スレバ一中隊三八人宛ナリ、依テ問フ、最初全体之人数幾何ナルヤ、但シ一聯隊ハ二大隊ナリ、一大隊ハ五中隊ナリ

第四問 外ニ分数四則

以上四問題 一〇時ヨリ一一時迄ニ答フル也

彼の記述によれば「今まで洋、和算共算術等は更に存せず、三月二十九日より俄に算術家え通学、昼夜勉強した」とあるが、青少年時代を専ら漢学塾で過した彼にとっては無理な話である。更に記述によれば「五月入問試験の節願込の人員多きが故に試験の上適當の者二組に分け、一組は五月入問致し、一組は十一月試験を要せず入問許可に相成るべき旨御揭示に相成」云々とあり、彼は幸い十一月組に編入された。当時は一年に二回宛入問が行われた。

第二章 明治十二年施行、第一回通学生卒業試験と

合格者氏名

学課(授業)は二月限りで終了、三月、四月は試験に備え休

課。不破震吉書簡によれば「何分学課多ク書数竹織ニテ三笈^{キツ}アリ、夜中就寤安眠セズ、奮発勉強ス」とある。三月十日頃試験規則一部宛渡る。三月三十一日試問の模様、試問の学課等監事局より報告。

試験学課は左の通り。

第一大学課 解剖学及実地解剖 生理学

第二大学課 外科総論 外科各論

外科臨床講義三日間即チキリニキ。ニキ。眼科

第三大学課 内科総論 内科各論

内科キリニキ三日間 産科 薬理学

五月二日より試験開始六月十日終了 十五日に仮に証書授与され、眞の卒業証書は七月授与とある。

五月二十七日の書簡によれば同課の者三六名中今までに五名落第と記している。

結局卒業生は左の通り

飯嶋泰亮 伊藤祐賢 今井欧二 今田龍之助

梅田了 榎田登 岡本堪 小川知彰

小野玄海 加藤国三郎 嘉屋富次郎 川井玄齋

熊田修司 五斗信吉 近藤正鉄 斎藤武善

佐々木敏 佐藤玄達 佐藤鯉一郎 猿渡常安

瀬尾元 添田芳三郎 高橋元英 滝沢清頭

千葉寅治 徳田周輔 服部宣造 不破震吉

堀内哲 堀藤七 守本規秀(以上三二名 五〇首順)

右氏名は「東京大学医学部別課生卒業生名簿」日本医学雑誌二三巻一号酒井、鈴木氏発表による。

第三章 進級証と卒業証書

現在の証書とは大いに様式を異にするものであるので参考迄に登載することとする。いずれも不破震吉に授与されたものである。

進級証

氏名

物理学 米印
 化学 米印
 解剖学 米印
 生理学 米印

右試業ノ成績ニ由テ
 此進級証ヲ授与ス

明治九年十一月

東京大
 学医学
 部之印

東京大学医学部

付記 米印 進級証並に卒業証書の米印は成績を甲乙丙等で示す。

進級証の大きさ 縦二十三種 横三十一種

東京大学医学部百年史一四九Pには明治十年四月十二日東京医学校と東京開成学校が合併して東京大学が創立されたことになっているが、この進級証によれば明治九年十一月既に東京大学医学部の名称を用いている。今後の研究を期待する。

卒業証書

氏名

〇〇県

族称

〇〇年〇ヶ月

医学卒業候事

卒業試問 全成績 米印

解剖学 米印 生理学 米印

外科病床実験 米印 外科論理 米印

眼科 米印 内科病床実験 米印

病理学 米印 薬剂学 米印

産科 米印

試問委員

明治十二年六月 東京大学医学部教授

三宅 秀 印

桐原真節 印

樫村清徳 印

田口和美 印

橋本綱常 印

足立 寛 印

永松東海 印

東京大学医学部総理

注池 田 謙 齋

号〇第医通

付記 通医第〇号とは医学通学生の成績順位を示す数字と思われ。

証書の大きさは 縦三十四種、横四十五、五種で進級証に比し

見事なものである

注 池田謙齋 越後長岡藩士、入沢健蔵の二男、望まれて池田家を嗣ぐ、独逸に留学すること六年、帰朝後要職を歴任、十年東京大学総理、大正七年四月死去、七八歳。

第四章 拾遺録

本稿に於ては不破震吉と間碯周治の書簡のうちに着点している医学関係或は大学関係の事項を参考までに収録した。

その一 十一年十月十五日の書簡

近々下谷、和泉橋、大学医学部付属病院にて内、外科臨床講義相始り候故、一層多忙に相成る可くと存じ候。

付記 医学通学生の専用の臨床教育機関として十一月開設され、東京大学医学部付属病院と称し、本郷の病院は東京大学医学部医院と呼ばれることになったが、後本郷を第一、和泉橋を第二と改められた。この第二医院は現在の三井厚生病院の前身である。

その二 十一年十一月十八日の書簡

大試験は規則に依れば十二月なり、然るに未だ何の沙汰も御座無く間、同課(同級)の諸友と計り、期日御定め被下度旨、校長へ嘆願に及び候処、甚だ曖昧の返答にて未だ相分らず云々。

その三 十二年一月二十一日の書簡

昨十二月小生(震吉)輩大試験可有之の筈の処、病者少なく、且教員橋本先生(綱常?)陸軍病院御用にて他県へ出張御留主中に候間、臨床講義有之候共十分行届かず候。月迫に相成り帰京致

され、因つて、本年暫くは臨床講義有之、然る後、大試験有之と申す事なり。既に本月八日より内外臨床講義有之、各々兩三名の患者受持ちに相成、一日中一、二回診察に参り候。

その四 十二年二月三日の書簡

(気管切開術について) 格魯布患者は東京府下の住人の小児にて年齢三歳也。此童子の姉年七歳既に格魯布に罹り、市中の医師治療中に死亡し、即時右の小児を伝染し、余程重進致して後、付属病院に來り治を乞う。仍て医学士橋本綱常先生気管切開法を施され候処、此術は医学部に於ても珍手術故、傍觀志願者多分有之、然処震吉氏同期の者第一より第一〇迄の者に限り傍觀補助許可になり、仍て震吉氏都合一〇名三十一日より外科手術室え出頭、手術終つて後患者を保護し、且患者の回復或は死亡迄の経過を筆記致すよう橋本先生より命ぜられ候に付、其日より帰宿することなく、昼夜五名づつ隔番にて保護致され候。

付記 この書簡は間碯周治が不破震吉に代り記す。

注 第一より第一〇迄の者 成績を意味するようである。

その五 脚氣病について

明治十一年(一八七八)七月十日、神田一ツ橋に脚氣病院が新設され、患者を二分し、漢洋の比較治療を開始した。結果は漢法が効果的で、当時これを脚氣角力と称したという。こと程左様に脚氣は流行病の觀を呈し、貴賤上下の別なく多発した。十四代將軍家茂の未亡人和宮も明治十年三三歳の若さでこの病気で他界されたことをみても想像がつく訳である。不破震吉の書簡をみると、彼自身も明治十年脚氣に罹患、一応軽快したが十一年四月再

発、十月初旬より症状顯著となり、次のように記している。「下肢に腫氣、心悸亢進、脈搏百十五、六、歩行時には呼吸短息、依って利水剤は勿論、下剤を用い一日三、四行の処、漸く十二月に至り快方に向う」とあり、当時の医学用語、医療の一面を知る一助として蛇足ながら登載した。

付記 奇しくも將軍家茂も慶応二年二一歳で脚氣にて死去した。

その六 十二年三月二十二日の書簡

医学部通学生の雇備について

右について震吉の書簡は次のように、大学側の採った方針を記している。

「他県ヨリ医学部ニ通学卒業生徒雇ヒニ参リ候節八月給三等ニ分チ、五月大試験ノ成績ニ因ツテ上等七〇円、中等六〇円、下等五〇円ト相定メラレ候。且又、通学生ノ学課モ本年五月卒業致ス人ノ外皆八期ニ相成候ニ付年限モ満四ヶ年ト相定リ候」

付記 右の数字は当時の世情からすれば將に破天荒の高額であつた。

その七 同じく同日付書簡

卒業証書授与の経緯

「医学部総理池田先生ヨリ仰セ出ラレ候ニハ、医学部新築ノ後未タ開校式モ無之、且規則モ全備致サズ候間、本年卒業ノ正則生ニ医学士ノ免状渡シ難キニ付テハ通学生ニ卒業証書ハ与エズシテ内務省医術開業免状ノミ相渡ス可ト申サレ候処、教官一統ヨリ折角永々教授致シテ卒業証書相渡サズ候テハ骨折替モ之ナク、生徒

ニ於テモ残念ニ候間、卒業証書必ズ相渡シ度様申サレ候ニ付此頃迄議論紛々一定仕ラス候へ共、方今評議ノ上卒業証書並ニ医術開業免状相渡ス可様確定仕り候」

その八 十二年六月十五日の書簡要略

明治十一年に入学を許された間崎周治等の学課は十二年四月二十日迄行われ、試験は五月十六日開始、二十六日に終了した。是は第一学課で、窮理学、無機化学、解剖学（骨論並ニ靱帯学）で一課につき五問題許り出され、其結果は同期の者百六〇名のうち百名及第、六〇名落第したという。幸に間崎周治は中位以上の成績で及第したが中殿しい試験といえる。更に第二期の学課は動物学、植物学、有機化学、解剖学（筋学、脈管学、内臓学、神経学）であるが試験の期日の明記はない。以上を以て間崎周治の東大での勉学の記載は終っている。この点については本稿のあとがき「間崎周治について」を参照されたい。

第五章 明治天皇東京大学医学部に御臨幸

明治十二年四月二十二日天皇の臨幸に際し一学生として前代未聞の盛儀に参列した間崎周治が当日の模様を伯父の不破為信に大学当局の通達と共に自らの見聞を郵送した。当日の状況を具体的に窺い知ることのできる珍らしい資料と言えるかと思う。

その一 来ル二十二日本部開業式施行

御臨幸相成候ニ付本日ヨリ諸教場休業候条此旨相達候事。

明治十二年四月十五日

東京大学医学部

その二 来ル二十二日、本部開業式施行之儀別紙之通り被違候ニ付テハ、同日各級生徒一同正午一二時迄ニ通学教場へ参集シ、總テ監事之指揮ニ從ヒ奉迎、奉送之敬礼ヲ行フベシ。但シ当日小礼服着用スベキ管ニ候得共、若シ所持セサルハ羽織、袴代用不苦候条、此段為心得相違候事。

明治十二年四月十五日

東京大学医学部

その三 東京大学医学部開業式

一 本日第十一時文部大輔並ニ本部総理、教授、職員等大礼服用参校

一 正午一二時三〇分 御出門本部え臨御、皇族、大臣、参議、大政官、書記官等供奉 但シ儀仗兵ハ本部門前ニ、諸生徒ハ門外左右整列ノ事

一 午後一時ニ着御、省院ノ長、次官並ニ本部総理、教授職員等門内奉迎、文部大輔、式部頭御先導御休憩所之着御

一 文部大輔式部頭ニ付シ事具スル由ヲ言上ス

一 出御、文部大輔、式部頭御先導式場え着御

一 文部大輔御前ニ進ミ本部全図及ヒ教則ヲ奉呈

一 勅語アリ

一 文部大輔並ニ本部総理及ヒ外国人教授總代祝詞ヲ奏ス

右畢テ文部大輔、本部総理御先導、諸教授及ヒ医院御通覽了テ、御休憩所ニ入御、暫時御休憩

一 還御、省院長、次官以下奉送諸生徒、儀仗兵等整列、敬礼等總テ臨御之節之如シ

一 式畢テ衆庶之縦覽ヲ許ス。

その四 本部正則医学、製菓学ノ通学スル者及ヒ医学、製菓学通学生徒ハ臨御之礼終ラハ通学教場ニ於テ折詰ヲ渡スヘク為メ前以テ切符ヲ下付致シ置クヘク候ニ付左之日割ヲ違ヘス同日監事局ニ受取ニ出ヘシ

来ル十八日 午前九時 通学各生徒

来ル十九日 午前十時 正則学通学各生徒

明治十二年四月十五日

監事局

注 文部大輔 今日の文部大臣で田中不二磨その任に当る、もと尾張藩士、維新に功あり、用いられて文部大輔、司法大臣にもなる、

明治四十二年没。

追録 間碯周治の書簡より關係分を記せば

「医学部開校式は皇国第一の学校なれば余程盛大にて、二十二日正午十二時より、校門右側に近衛兵一大隊各礼服にて二列に整列、左側に生徒千五百名二列に整列し、門内には左右に総理、教員、学校掛り官員整列致し、化学局諸教場、病院共各器械を陳列し、解剖局には器械、種々の人体内臓等アルコール漬等列ね余程の奇観なり。其外筆紙に尽しかたし。且主上の勅語等もあり云々」

尚、序ながらこの盛儀のための準備の様もやはり彼の書簡により記せば

「当節は学校地内の飾付に数十人の人足を雇い、本月上旬より頻に洒掃並に所々の營繕等致し居候て、漸く出来仕候に付、明後

日文部省並に式部寮より下見に御出被遊候由、定而見事なる事と存候。尤も奏業も有之候とのことなり云々」

あとがき

本文の資料は前記のように不破震吉と間碓周治の書簡に基づくものであるので、両氏について聊説明をしてあとがきに替えようと思う。

○ 不破震吉は嘉永四年六月二十六日美濃国羽栗郡不破一色村（新幹線 岐阜羽島駅北方 三軒）現在岐阜県羽島市正木町不破一色の代々医を業とする家に生れ、不破為信の末弟で明治七年二月二十六日遊学のため上京、その時は未だ東京大学医学部は存在しないから前身である東京医学校に入学、在学中に東京大学医学部となり、医学通学生の部を第一回の卒業生として明治十二年卒業、故郷に錦を着て帰郷した。その後郷里の近くで開業したが門前市をなす盛況であった由であるが、明治十八年十一月十九日腦卒中中で急死した。享年三十五歳であった。

○ 間碓周治について

不破為信の次弟の周治と称する者、尾張亀崎（現在半田市の内）の医師間碓謙三の養子となり医業に従事していたが明治三年死亡、本文の周治はその長男で初名は文治、父の死後周治を襲名した。嘉永六年九月十七日の生れである。明治十一年同じく東大医学部通学課程に入学、震吉と同宿して勉学する。伯父の為信に震吉共々詳細に近況を報告したのが本文の資料となった訳である。十二年八月震吉の卒業による帰省に際し、夏季休暇を利用して共

に出立帰家したが、その後復学した様子のないところをみると、恐らく実家に未亡人の母を残して留学を続けることに無理が生じたのではなからうか。又一面このままで医術開業免許を得る可能性があったからではなからうか。果せるかな、永年伯父為信の指導を受けたのと叔父震吉より西洋医学を修得した履歴を認められ、明治十五年九月二十二日愛知県より甲第八百十九号で「医術開業免許候事」の免状を下附されている。大正四年九月二十三日没。免許時の愛知県令は國定廉平である。

付記 不破為信 文政十二年生、明治三十二年五月没、七十一歳。間碓周治（初代）天保三年生、明治三年六月没、三十九歳、共に京都御所の典医高階丹後介の門人。

（岐阜女子大学）